

わかったようでわからない

キリスト教主義教育

鵜殿 博喜

言葉というのは悩ましい。言葉を使わなければ意を伝達できないのが人間の宿命と言えるなら、言葉を使っても意を伝達できないのも人間の宿命だからである。ましてその当の言葉を厳密に定義するのがむずかしいとなれば、なおさらである。

キリスト教主義教育、この言葉を聞いてわれわれは何を想起するだろうか。キリスト教教育ではなくてキリスト教主義教育である。キリスト教教育ならば、キリスト教を、すなわちキリスト教という宗教を多面的に教える教育であると、わりあい素直に理解できるであろう。考え方としては、文部科学省が学校教育に導入しようとしている宗教教育と同じである。宗教教育と宗教主義教育というふうに並べてみると、宗教主義教育の方が怖い感じがする。なにか原理主義的なにおいがするのである。ところが、キリスト教教育とキリスト教主義教育となると、キリスト教教育の方がストレートな印象で、キリスト教主義教育の方は受ける印象があいまいである。

むかし読んだので記憶が定かではないが、漱石は「イズムについて」というエッセーのなかで、イズムとは整理された引出しのよう便利なもので、それができあがるまでの苦勞の過程は消えているというようなことを書いている。カルヴァン主義とかルター主義という場合はこの漱石のイズム観があてはまるように思われるが、キリスト教主義の場合の主義はどうも違う。社会言語学者の田中克彦氏は、古いエッセーを集めたエッセー集のなかで、「主義と訳される西洋語のもとにはイスムス、イズムだが、そこには、かならずしも

〈主義主張〉という意味はない。アルコール症のように、望んでなったのではない一定の症状をさすこともあるから、マスクス主義がどうしてもきらいな人は、これを語源にしたがってマスクス症と解釈してがまんする手もあるのだ。じじつ主義にはかならず症状的なものが伴っている。」(『法廷にたつ言語』 岩波現代文庫 229 ページ) と言っている。この伝でいくと、キリスト教主義教育とはキリスト教的な病に犯された教育、あるいはキリスト教がなくては寝ても覚めてもいられない中毒症状の教育ということになり、おかしいことになってしまう。それともキリスト教の「主義主張」を教える教育なのか。そうするとキリスト教教育よりもキリスト教主義教育の方がより宗教的に硬直した教育になってしまう。しかし大学で正規の科目として設置されている「キリスト教の基礎」の趣旨とはどうも違うようである。

本学で一般に使われているキリスト教主義とは、おそらくキリスト教的価値観ということなのであろう。あるいはキリスト教的文化というべきか。キリスト教に内在している考え方、あるいはキリスト教という宗教が生み出してきた文化を総称してキリスト教主義といっているのか。

それにしてもキリスト教主義とはあいまいな言葉である。このようなあいまいな言葉のもとでキリスト教主義教育の主翼を担っておられる先生方のご苦勞は並大抵のことではあるまい。明治学院大学のキリスト教主義教育がその教育の果実を味わえるとすれば、それは絶えざる内省と試行を積み重ねながら教育がなされる場合のみであらう。その意味するところは教養教育と同じである。

(うどの ひろよし 所員・経済学部教授)

